

## 「日本民家園見学会」開催（2018.11.4）

本部事務局

2018年11月4日(日)、「川崎市立日本民家園」の見学会を開催しました。

昨年は参加者が集まらず中止となりましたが、今回4つの大学部会の会員、留学生、事務局を合わせて22名が参加しました。小雨交じりのあいにくのお天気にもかかわらず、日本語班、英語班に分かれてそれぞれボランティアガイドのご説明を聞きながら、会員、留学生とも大変興味深く見学しました。

以下、会員と留学生から感想文をいただきましたのでご紹介します。





## 「日本民家園見学会」に参加しました

一橋大学部会 宮崎清(三井物産OB)

2018年11月4日の曇空で時々小雨の降る中、掲題見学会に留学生の方さんと共に参加しました。参加者は総勢22名で、会員が8名、留学生が12名、事務局が2名とのことで、留学生の国別では、中国3名、台湾3名、スリランカ2名、フランス・ナミビア・韓国・米国各1名と多彩な顔触れでした。

日本民家園は川崎市の生田緑地内にあり、昔の民家の家並みが並ぶ園内の木々の赤色や黄色の葉を小雨が鮮やかに美しく見せてくれていました。白煙が立ち上る民家の中ではボランティアの方がたが「いろり」で殺虫・抗菌の為に火を焚いていて、煙たくもありましたが、昔にタイムスリップをしたような感慨を持ちました。

50年以上前のことですが、夏休み・春休みには父母の田舎(長野県)に一人で遊びに行っていました。都会育ちの私にとり、従弟たちとの川遊びなどは楽しい思い出です。

しかし、父の実家は茅葺で中は薄暗く、外とは障子1枚の仕切りのみで、隙間もありました。天井はすごく高く、夏の夜は快適ですが、冬は炬燵だけでとても寒い思いをしました。食事も美味しくありませんでした。その頃の長野ではおかずは漬物ぐらいでした。それでも、親戚の方がたの思いやりや優しさが懐かしく思い出させてくれました。

少々脱線しましたが、ガイドの近藤様の説明は、民家がもともとあった場所を訪問し、深く学習されたとのことでしたが、大変説得力があり、面白く、なるほどと感服しました。そうしたお話の中に先人の知恵に感心することがたくさんありましたが、現在の我々がそれらをあまり生かしていないのではと、痛感させられました。

見学会の後で、方さんと互いの感想を話合えたことも良き思いでとなりました。

## 川崎市立日本民家園見学会

方可可(一橋大留学生)

11月4日に、三井V-Net本部が主催した「留学生古民家見学会」に参加しました。その日は朝からどんより曇っていて、いい天気とは言えないけど、私はその影響を全く受けなくて、見学にわくわくしていました。向ヶ丘遊園駅から歩いて15分くらいで、川崎市立「日本民家園」に到着しました。留学生たちが日本語ガイド、英語ガイドに分けられてから見学が始まりました。

まずは正門の本館展示室で日本語ガイドの近藤さんから簡単な説明を受けました。この日本民家園は、急速に姿を消しつつあった江戸時代の古民家を後世に残し、また市民共通の「ふるさと」を作ることを目的として昭和42年に開園した古民家の野外博物館です。現在は25棟の文化財建造物が移築保存されています。本館展示室では、民家の間取り、形、つくる技術、普請など様々な古民家に関する基本的知識を学ぶことができます。

展示室を出ると、斬新で立派な2階建てが目に入りました。100年前の建築とは思えなかったです。優雅で落ち着いた佇まいには和風の美学が感じられました。小道に沿って行くと、日本民家園唯一の西民家である井岡家住宅に着きました。江戸時代の京都では、家の間口の広さで税金を決めていましたので、商家は間口を極端に狭くして税金を少なくしたのです。商家である井岡家の吊上げ式の大戸は、間口を最大限に利用する工夫として、いつの時代も変わらぬ庶民の知恵とも言えるでしょう。次に見学した四軒の民家はみんな合掌造です。合掌造民家はテレビでしか見たことがなかったので、私はその屋根の高さに驚きました。ガイドの近藤さんの話によると、冬の時雪が何メートルまで積もるので、二階から出入りすることにもなります。その上、どちらも囲炉裏および火天を備え、防火と物の乾燥に役立つようです。

見学した時、よく先人の知恵に感服しました。例えば小動物から穀物を守るために床を高くした高倉や、担いで移動できる船頭小屋や、屋根の頂上の土が散乱ないように草花を植えた「芝棟」などは先人の知恵の結晶ではないでしょうか。

さらに、「日本民家園」にいる数多くのボランティアたちの姿や、民家内部の耐震補強工事などを見て、日本の古民家を永く将来に残す「日本民家園」の決心を感じました。